

氏名(本籍)	わし 鷺	たに 谷	はな 花(東京都)
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第3026号		
学位授与年月日	平成15年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	文芸・言語研究科		
学位論文題目	「大東亜映画」と「映画戦」 —戦時期日本映画の生成論的研究—		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学教授		名波弘彰
副査	筑波大学助教授	博士(文学)	宮本陽一郎
副査	筑波大学講師		吉原ゆかり
副査	明治学院大学教授		四方田剛己

論文の内容の要旨

本論文は、主に1940年代の総力戦体制下の日本文化について、とりわけ「大東亜共栄圏」と呼ばれた諸地域の観客に向けた「大東亜映画」に注目し、映画作品を考察するのみならず、それを成立させしめた諸状況を、広範な資料分析を通じて論じるものである。これにより「大東亜映画」を生成した文化的・政治的な諸力学の葛藤の場を解明する。構成は以下の通りである。

序章

第1部 「大東亜映画」の生成

第1章 「大東亜映画」論序説

第2章 アメリカの影—戦時期日本映画における「アメリカニズム」の位相

第3章 アジアの孤独な親方—戦時期「日支」映画関係をめぐる考察

第4章 『阿片戦争』と映画戦—「大東亜共栄圏」のハリウッド

第2部 「大東亜映画」の配給と受容

第5章 李香蘭、日劇に現る—歌ふ大東亜共栄圏

第6章 越境する『木蘭従軍』—戦時期「国民文化」における文化の交通

第7章 「大東亜共栄圏」を演じる—戦時期日本映画における<非日本人>の群像

終章／参考文献／フィルモグラフィー／図版一覧／初出一覧

第1章「大東亜映画論序説」では、総力戦下の日本映画に示された二つの課題としての、国内向けの「国民映画」と、国外向けの「大東亜映画」に関して、主に映画行政・映画産業・映画ジャーナリズムの側からの言説を分析しつつ、両者の複雑に振れた関係性の解明を試みる。

第2章「アメリカの影」では、戦時期日本映画が、「国民映画」と「大東亜映画」のいずれの道を選んだとしても、避けることのできなかつた、アメリカニズムの精算という問題を取り扱う。アメリカの影は「国民映画」と「大東亜映画」の亀裂そのものを物語る。

第3章「アジアの孤独な親方」では、戦時期日本映画にとってのもうひとつの難題となった、他者としての「支那」との関わりについて論じる。「支那映画」は日本側から見て軽蔑の対象であると同時に、「大東亜映画」を形成するパートナーでもなければならぬ。日本映画と「支那映画」とのあいだの屈曲に満ちた関係を総括することは、とりもなおさず「大東亜戦争」における日本とアジアの状況布置を再定義することだった。

第4章『阿片戦争』と映画戦—大東亜共栄圏のハリウッド』では『阿片戦争』の企画、プロダクション、配給、観客による受容、フィルムの表現内容を分析してゆくことで、戦時下において一本の映画作品が作りあげられ、日本とその他の地域の観客に送り届けられるまでのプロセスを総覧する。アメリカ映画の影響をあからさまに示しつつも、反英米のプロパガンダ映画であり、「国民大衆向けの娯楽映画」でありながら「大東亜映画」でもあるという、きわめて両義的な、不確定性をはらんだ映像テキストが成立していたことを明らかにする。

第一部は主に「大東亜映画」の生成プロセスに注目した考察であるのに対し、第二部においては、「大東亜映画」という制度への映画人の関与の在り方、そして観客による受容・再解釈のプロセスを多角的に考察する。

第5章「李香蘭、日劇に現る—歌ふ大東亜共栄圏」では、映画作品の意味内容そのものの考察ばかりではなく、映画が上映される場におけるメディア・イベントとしての「日劇七回り半事件」を分析する。ここでは身体文化を通じて「大東亜共栄圏」が実体化され、観客によって受容される過程が詳細に解明される。

第6章「越境する『木蘭従軍』—戦時期「国民文化」における異文化の交通」では、1939年に日本軍占領下の上海で製作され、現地の観客の多くに「抗日映画」として受容された『木蘭従軍』が、1941年に日本で「東宝国民劇」の一プログラム『木蘭従軍』として劇化されるまでのプロセスに注目し、文化の越境と翻案の問題について論じる。

第7章「大東亜共栄圏を演じる—戦時期日本映画における非日本人の群像」においては、戦時期日本映画において日本人が非日本人を演じたケースを取り上げ「非日本人」キャラクターが頻繁に演じた、歌、ダンス、祈祷などの伝統芸能・儀式的パフォーマンスの果たしていた意味生成の機能を分析する。

結章では、「戦後」における「大東亜映画」の記憶の抑圧と、それが現在の日本と東アジアを取りまく状況のなかで持つ意味について考察を行う。

審査の結果の要旨

本論文は、「大東亜映画」という、戦時期においては頻繁に論じられながら、ながらく日本映画史研究において看過されてきた概念に、初めて本格的に取り組んだ論考である。「大東亜映画」に含意される脱国民国家的な指向性に注目したことにより、戦時期ナショナリズムを暗黙の前提とした従来の研究で見落とされていた膨大な問題領域に初めて光を当てたという意味において、まさに画期的な研究として評価できる。

方法論においても、映画作品の分析や背景研究のみに依存せず、「大東亜映画」をめぐる言説を文献資料から検討し、さらに両者のあいだの双方向的な関係を考察しているという点において、現在のカルチュラル・スタディーズの先端的な研究成果として評価することができる。映画関係者やコレクターが所蔵していた知られざる資料を数多く発掘した功績は、本論文の価値をいっそう高めている。

緻密な資料分析と作品解釈に立脚しつつ、本論文が一貫した議論を序章から結章までいっさいの破綻なしに展開している点も高く評価されるべきである。先行研究が、戦時期映画を国策映画として一面的に批判するか、あるいはそれに対する反動として、戦時期映画の脱国民的な多様性のみを取り出して再評価するかの、いずれかの傾向にとらわれていたのに対し、本論文はそのいずれにも陥ることなく、峻厳なスタンスを保って批評を展開している。これは映画研究という枠組みを大きく超えて、日本文化と東アジア文化そしてグローバル文化とのあいだの関係性についての現在の学界の論議に、歴史的視座を与えるものである。

もちろん本論文には、残された課題がないわけではない。

第一に、「大東亜映画」の制度史の分析から始まり東アジア文化論に展望を開こうとする本論文の遠大な企図は、個々の映画作家の営為とその個別性がある意味では必然的に後景に追いやる。とりわけマキノ正博のような映画作家を扱う場合、先行する作家論に対しても説得力をもつ、より柔軟な議論が要請されるだろう。

第二に、文献調査がかつてない徹底したものであったのに対し、映画作品に関しては今回の調査が及ばなかったものが残された。これに関しては国外のフィルム・アーカイブの調査が今後是非とも必要とされる。

以上の問題点は、本論文の価値そのものを減ずるものではない。第一の問題点は、本論文が方法と論理において優れた一貫性を持っているがゆえに逆に浮かび上がる課題といえる。第二の問題点は研究条件そのものからくる制約であり、著者はすでに国外調査に着手し、海外の研究者とのネットワークも築きつつある。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。